

ギターCD レター from yakateru(第 46 号)

ヴァイスの最高傑作、「組曲イ短調」が、実は、ボンセがまだ売れっ子になっていない時に、自分の曲を巨匠ヴァイスの名で売り込んだ作品であったという、今だったら、佐村河内氏のように袋叩きになる事件かもしれませんが、この頃は、いい時代でした。え！ そうなの！ そうだと思った！ (▽*)アハですんじょうのだ

BACH の次は、ヴァイスです。彼の親しみやすい曲は、素敵です。

えっ！ ヴァイスじゃなくボンセなの！

BACH に並んで、とてもお気に入りのヴァイスである。以前書いたように、彼の曲は、ビバルディのようにわかりやすく明解で、かつ、躍動感にあふれている。まあ、でも、一番の彼の作品のいいところは、難易度が高くない曲でも、すごく爽やかなバロック気分が味わえるところだろう。

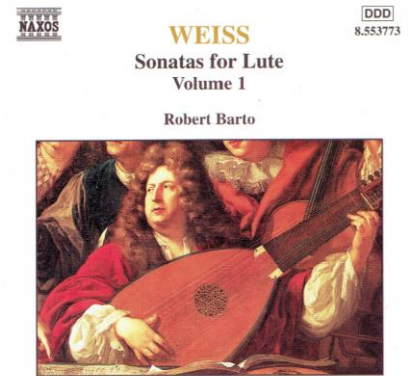
今、ギター合奏曲で、BACH のブランデンブルグ協奏曲第 3 番と、ビバルディの調和の靈感からの作品を練習しているが、確かに、ブランデンブルグは弾いていても奥深く、ちきんとしっかりした感じである。が、かっこよさ、ノリの良さは、数段、ビバルディに軍配が上がる。BACH 先生から言えば、同じ音の永遠なる繰り返しながら、楽譜に落としている時には、手抜きを感じるのかもしれない。隅々まで、細かく手を入れなければ気がすまない、そんな感じだ。だが、ビバルディにしる、少し時代が下がったモーツァルトにしる、単調な音の流れでもそれが臨場感を上げるのであれば、バンバン使っている。ビバルディの特徴だと思うが、「ジャカジャカ、ジャカジャカ、ジャカジャカ、・・・」と、フレーズごとに和音の 1 音だけが、一音ずつ降下していくあの躍動感。弾いていて、精神的に酔ってしまい、自己陶醉してしまう。至福の時間である。弾いてて楽し！

というようなビバルディ的な魅力に満ち溢れているのが、ヴァイスのリュート曲なのだ、ワタシ的には。「組曲ニ短調」の最初のプレ

リュード。アルペジオの初心者の練習曲のようなのだが、弾くと、すごい。(オマケに冒頭部分だけ裏に載せました)

クーラント、プーレ、最終曲のジグも同じような躍動感がある。テンポが遅くなるアルマンデやメヌエット、サラバンドは、多少、短調で退屈なところがあるが（といっても、BACH と比較すればというハイレベルな意味です）、組曲全体も壮大で、かつ難易度も低く、弾きこなすのにそんなに労力を使わず、かつ、とても大きな感動を与えてくれる、そんな曲だ。

この前まで（といっても 10 年ぐらい前か？）、ヴァイスの、いやバロック時代のリュート組曲の最高峰といわれていた「組曲イ短調」が、実は、ボンセの作曲で、作曲者名を偽って楽譜を売っていたことが分かり、ありやりの感じがあるが、確かに、最初のプレリュード以外は、ヴァイスに BACH 的な感性というか天才性があったならば、作っただろうと思う曲ばかりである。なんといっても、この組曲イ短調のサラバンドの気品は、すべてのギター曲の中で一番だと思ふし、全音楽の中でも、マーラーの第 5 番のアダージオに並ぶのではと個人的に思っている。弾いていて、その気品の高さに、天にも昇る気持ちになる。ボンセはすごい！ ん？、ヴァイスの話であった。ということで、ギター界の佐村河内氏であるボンセ氏の話は置いておき、ヴァイスに戻る（ちなみに、ボンセは自作の売り込みで、他人に作らせたわけでは



ないが)。古い楽譜の解説書には、このイ短調、ヴァイスの最高峰の曲であるということに加え、「現代にも通じる何ものかを秘めた名曲」とある：70 選解説)

彼の最も有名な曲は、第 23 号で冒頭の楽譜を載せた「ファンタジア」であろう。BACH の平均律等と同様に、自由な発想のプレリュードと荘厳なフーガで構成されるこの曲は、「組曲イ短調」が、彼の作品でないとバレット今日では、最高峰の曲になるのではないかと思う。その他も、明るく開放的な「組曲ニ長調」や、「バレット」、「ソナタイ短調」等、数多くある。

さて、今日のお勧め CD は、このヴァイスの作品を演奏したものであるが、意外と CD 録音されたものが少ない。私のコレクションのなかでは、ナクソスのリュートソナタ集でのヴァイス作品集が唯一のものではなからうか。演奏者はロバート・バート。「ファンタジア」等、単体で CD に入っているのはいくつかあるが。ちなみに、ギター 100 選のオムニバス CD (第 25 号で紹介した CD) で見てみると、BACH、タレガ、グラナドスらは 5 曲入っているが、ヴァイスは「ファンタジア」1 曲のみ。いや、演歌、映画音楽に続いて、ヴァイスの作品を広めることもしなければいけないかも。・・・(続)

